

ことばの教室から

ことばの教室では、話す、聞く等の言語発達の遅れや、構音障害、コミュニケーションに課題がある児童生徒を対象に、自立活動の指導を行っています。

特に、新年度は「ことばがはっきりしない」「何を言っているのか聞き取りにくい」「発音が不明瞭」といった先生からの声が多いです。

そこで、今回は構音障害についてお話したいと思います。

構音とは？

言語音をつくる過程には、

「発声」「共鳴」「構音」があります。

構音は、言語音をつくる過程の一つで、一般的に発音することを言います。

構音するために必要な器官が、図1の構音器官です。

母音と子音はそれぞれ、下記のような条件で音が作られます。

母音

- ・口唇の丸め
- ・舌の位置（前後）
- ・舌と口蓋の広さ（舌の高さ）

子音

- ・声帯振動の有無
- ・呼気の妨げの位置（構音点）
- ・呼気の妨げ方（構音法）

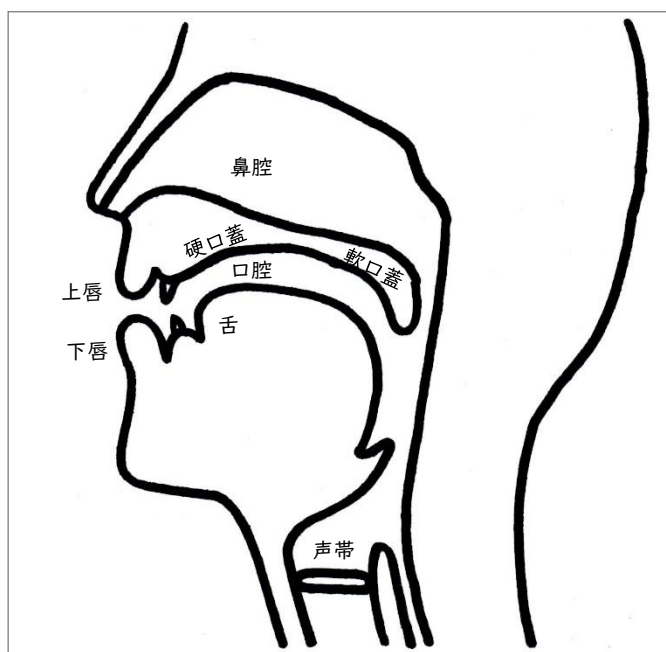


図1 構音器官

この発声・共鳴・構音器官の運動機能と音韻意識の発達は、構音の習得に大きく関わっています。

? 音韻意識とは

話しことばを構成する個々の音やその順番における意識のこと。例えば、「くるま」ということばは、「く・る・ま」という3つの音からなって、「く」から始まることばであるという意識。

しりとり たぬき → きつね → ねこ

逆唱 たぬき 逆さから言ったら? → きぬた

音削除 たぬき の「ぬ」を抜いたら? → たき

音韻操作と聴覚的記憶が必要な遊び。

音韻意識は、文字学習の基盤に!!

分解・抽出・同定などがある。

4歳ごろから芽生え始める。

構音障害の種類

構音障害には、以下の3種類があり、それぞれアプローチ方法も異なってきます。

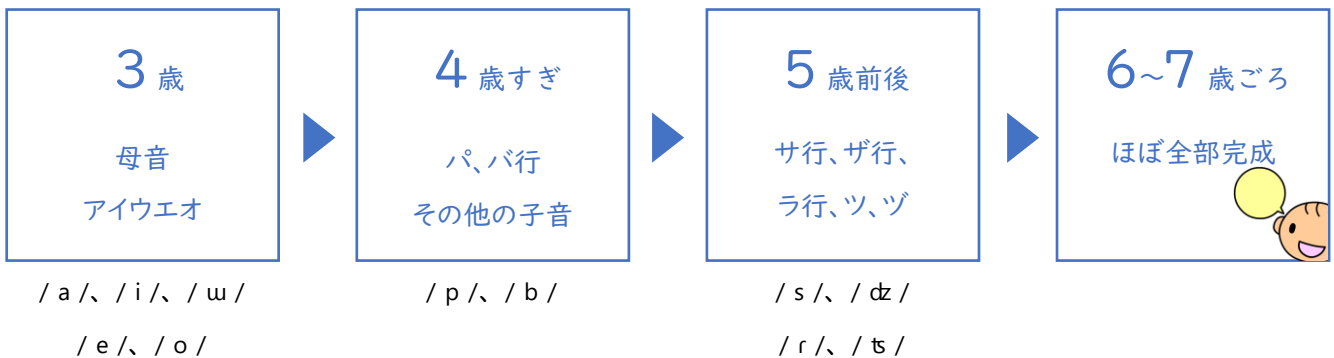
- ① 器質性構音障害：発音にかかわる器官の構造に問題があるタイプ。
(口蓋裂、舌小帯短縮症、先天性鼻咽腔閉鎖機能不全など)
- ② 運動性構音障害：神経学的な問題が原因となるタイプ。
(脳性麻痺、神経・筋疾患、脳血管疾患後など)
- ③ 機能性構音障害：発音にかかわる器官に構造上の問題がなく、神経学的な原因もないにもかかわらず、音の置換や省略、^{ひず}歪みが見られるタイプ。
(構音器官の運動機能の未熟や音韻発達の遅れ、言語環境など構音獲得過程において構音の習得を妨げる要因があるのではないかと考えられている。)

構音の獲得時期

構音の発達には順序性があると言われており、日本語の母音アイウエオは3歳くらいで明瞭に発音できると言われています。

子音は、一般的に視覚的に確認しやすく、動きがダイナミックな両唇破裂音（パ、バ行）が早期に獲得され、歯茎摩擦音、弾音、破擦音（サ行、ザ行、ラ行、ツ、ヅ）の獲得は5歳前後と言われています。

その他の音は、4歳を過ぎるころまでに習得されていきます。



※音は全て、このようなIPA（国際音声記号）で表します。

子どもによっては個人差がありますし、研究者によっても異なりますが、だいたい小学校入学の

6~7歳ごろまでには、ほぼ全部の日本語の音が完成するとされています。

構音の誤りの種類

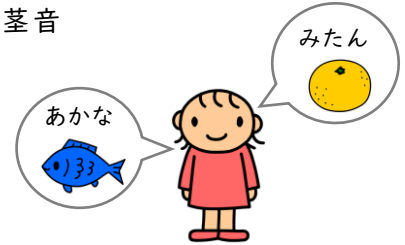
誤り音（聴覚判定に基づく分類）

- ① 置換：本来、構音されるべき音ではなく、別の音に置き換わる。日本語として聞き取れる音。

例 ミカン/mikan/→ミタン[mitan] 軟口蓋音→歯茎音
/k/→/t/、/s/→/t/、/r/→/d/が多い。

- ② 省略：音が抜け落ちて構音される。

例 サカナ/sakana/→アカナ[akana]
破擦音の/ʃ/の/s/や/tʃ/の/j/など、摩擦部分が抜け落ちることが多い。



- ③ 歪み：本来、出されるべき音とは違う、正しくない音。日本語として聞き取れない。そのため、さまざまな種類の音が存在する。

異常構音（構音操作の異常に基づく分類）

口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音、咽頭破裂音、咽(喉)頭摩擦音、声門破裂音など

音形の誤り

音形の誤り：音としては構音できるが、前後の音の影響により特定の単語において音を誤ること。

- ① 省略：「ひなまつり」の→「ヒナーツリ」語の一部が音節ごと省略される。音節数の多い語の語中に見られやすい。
- ② 同化：「こっぷ」→「ポップ」前後の音の影響を受け、その音と同じ構音操作をしてしまう。両唇破裂音の影響を受けやすい。
- ③ 転置：「おくすり」→「オスクリ」語の中において音や音節が入れ替わる。

音形の誤りは、構音器官の運動の未熟さや音韻分解の不十分さとの関連が考えられ、

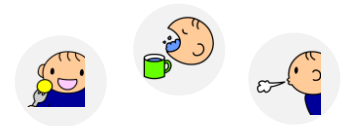
4歳過ぎには見られなくなっていくとされています。

構音障害かな？と思ったら…

不明瞭の原因はどこにあるのか？考えてみて下さい。

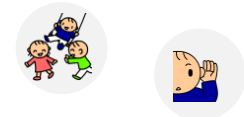
✓ 構音器官

- ・形態や運動機能に異常はありませんか？
- ・音声言語の表出は、喉頭や舌、口唇、顎など様々な動きを同時に働かせる協調運動!!
- ・運動発達全体の遅れやつまづきがこれらの微細運動へ影響を与えることも。



✓ 言語発達

- ・生活年齢に比べ、言語発達に遅れがありませんか？
- ・まだその音を獲得する段階に達していないという場合も。



✓ 聴覚的弁別力・音韻意識

- ・誤った音と正しい音を聞き分ける力はどうですか？
- ・自分の言った音や他人が言った音について、聞き分けができていないと正しい構音の定着が難しくなります。
- ・また、自分の構音の誤りに気付いてもまだ随意的に修正できない時期は、言い直しをさせても効果はありません。

構音指導開始のタイミング

構音指導には、目標となる音を認識し「誤った音」と「正しい音」を聞き分ける力が必要です。指導の開始時期は、音韻意識が芽生え始める発達年齢4歳頃。それ以前だと構音器官や運動能力、言語機能がまだ幼く、自覚も乏しいためです。

構音器官や運動機能に問題がなく、構音を獲得する時期になっても正しく言えない場合や、「友達にからかわれる」「話したくない」等、二次的な問題が起こっている(本人が自覚し始めた)場合は、構音指導開始のタイミングとも言えます。

一人一人の状態に対応した支援の方法がありますので、一度「教育相談」までご相談ください。

📖 参考文献

「特別支援教育における言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援」大伴 潔、大井 学（編著）

「言語聴覚療法シリーズ 7 改訂 機能性構音障害」本間慎治（編著）

「言語聴覚士のための言語発達障害学 第2版」石田宏代、石坂郁代（編著）

イラストは視覚支援シンボル「Drops」を使用しています。